
アレ

Dandy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アレ

【Nコード】

N1336M

【作者名】

Dandy

【あらすじ】

ぶっちゃけ駄作です。けど消すのもあれだったので勢いで投稿した次第であります

（前書き）

……なぜ書いたか自分でも謎です。インスピレーションが浮かんでからトントン拍子で書き上げ、終わった瞬間「……なんじゃこりや」と。初めてです。見直してもせず投稿するなんて

でもー、2時間かけたから一応投稿しようかなーと思ったんです。もし評価にマイナスがあるとしたら有無を言わずマイナスの嵐でしょうね、はい

もつとあの人を生かすシチュエーションがあつたよなあ……。後悔先に立たず。あれ？意味違う？

まあ……これも私色。手を抜くところなるよ！ってことですね。最近短編にはまってます。とはいえ出来は微妙。微妙ていうかダメ

……

約5分ということですがたぶん2分くらいです。適当にあしらってくださいな。はい！

三千院家のハウスメイドであるマリアさん。普段の昼間はナギお譲さまもハヤテ君も学校でいないので1人なのです。形式的には人はいませんが実質はたった1人。

今はキッチンで夕食の下ごしらえ。相変わらず手慣れた包丁捌き。鼻唄まじりにキャベツを繊切りにしていたがピタリと手が止まる。そして顔が一気に青ざめた。

（これは……間違いなくいますわ。どうしましょう……）

背筋が凍るような、そんな感じに襲われた。さっきまでの鼻唄はなく、ごくりと息を呑んだ。ゆっくり、ゆっくりと首を後ろに回す。出口まではそう遠くはない。しかし被害を被ることなくたどり着けるかどうか甚だ疑問だった。萎縮して足が動かない。

（……ハヤテ君もいないのにどうすればいいのかしら……！）

今にも泣き崩れそうな、頼りない表情をしている。普段のマリアさんでは到底考えられないことだった。しかしキッチンにいては余計に不安になるのでなんとか安全な場所に逃げなければならぬ。退路までは5m。だがアレはどこに潜んでいるかわからない。右、左、右、左。くまなく目を配るがアレを見つけることはできない。いるのは確かなこと。しかしアレがどこにいるかわからない以上へたに動けばたちまち餌食になってしまいかねない。

（……ここを通るのは極めて危険な気がしますわ。こうなったら確実に逃げられる方法を……）

別の逃げ場を探そうと首を戻した、まさにその瞬間。流しの横をアレが横切った。マリアさんの体が硬直する。

「ま、まさかこんな場所に出てくるなんて……！」

「は、早く！早くどこかに行ってください！」

ぐらりと体が倒れ尻餅をついてしまった。完全に腰が砕けている。もはや立つこともままならない。立てないまでもなんとかキツチンから出ようと足をばたつかせて後退りする。しかしアレは一匹ではなかった。今度は天井にアレを見た。

「あ……ダ、ダメですよ！落ちてきたら！絶対にダメですよ！」

祈るような思いで天井のアレを見つめる。見たくもなかったが視界から消えるまではおちおち目をはなしてなどいられなかった。祈りが通じたのかアレは素早く天井をつたっていく。

（なんとか助かりましたわ……）

危機は去った。そう思ったのもつかの間、あろうことが一旦は去ったアレが見事に床に落っこちてきたのである。ポトリと落ちてきたアレはお腹を上にしてじたと暴れている。いよいよマリアさんの顔は悲痛なものへと変貌する。

「な、何をしているんですか！起き上がって早くどこかに行ってください！」

前後不覚に陥り持っていた包丁をブンブン左右に振り回した。かくなる上はアレを叩き切ってしまうかとも思ったがアレとて生き物。それに殺した後の処分のことを思うと余計に背筋がぞくぞくし

た。

そしてようやくアレが起き上がった。体はマリアさんの逆を向いている。

「そ……そのままどこに行つて！お願いですから……お願いですから！」

ひくつと嗚咽を漏らす。腰砕けになり、もう自力では動けない。後はアレがどこかに行くのを願う他はない。アレはカサカサと歩き出した。ようやく……と大きなため息をしたが、平和は訪れなかった。何を思ったかアレは突如方向を変えマリアさんに向かって猪突猛進、いや、虫突猛進してきた。

「や、やめてください！こつちに來たらいけません！私をどうしようというんですか！」

もう抵抗する術はない。なすがまま襲われるのを待つ身になったマリアさん。それでもなんとかこの場を脱出するため入らない力を目一杯入れ立ち上がった。

（あと……もう少し……）

既に汗をびっしょりかいている。いい汗ではない。やっと逃げられた……。安堵の表情で廊下に出る。額の汗を拭う。

「あれ？マリアさん。どうしたんですか？そんなに慌てて」

「……ハ、ハヤテ君」

学校に行っているはずのハヤテ君。それでもマリアさんは気が気なだけにそんな細かなことなど考えてなどいらなかった。すぐに

助けを求めた。

「ハヤテ君ハヤテ君！アレがキッチンに……とてもじゃないですが入れません！」

「アレ……？」

「そうです！お願いですからアレを！早くアレを駆除してください！」

「……それはできません」

「え……？な、なんでですか……！」

「だって……アレは僕の大事な友達なんですから」

にこつと笑うハヤテ君。その手のひらにはアレが。

「な、な、なにしてるんですかハヤテ君！」

「マリアさんも千差万別、生き物を好きにならなきゃダメじゃないですか。アレと仲良くなるいい機会です」

「ちよっ……ダメです！やめてください！」

「ほら……マリアさん」

どどんアレが近づいてくる。手のひらのアレが。

「ハ、ハヤテくーん！」

大声で叫ぶと急に目の前が変わった。ハヤテはおらず、いる場所はマリアの自室。どうやらソファーに座って寝てしまったようだ。夢だとわかると大きく深呼吸する。

（私としたことが……なんて変な夢を見ているんでしょうか……。疲れてるんでしょうか……）

首を2回回し肩をほぐす。なんとか冷静さを取り戻すと今の大声を聞きつけたナギがマリアの部屋に飛んできた。

「マ、マリア！どうしたのだ？今の叫び声は」

「……いいえ。なんでもありません。心配させてすみません」

「な、なんだ……。何事もなくてよかったぞ」

ナギも安心し笑顔がこぼれた。マリアは夢で良かったと内心ホツとした。

「そうだ。マリアに見せたいものがあるのだ」

「見せたいものですか？」

「うむ。実は珍しく学校に行ったらまたまた見つけてハヤテが取ってくれたのだ」

「……なんですか？」

マリアも好奇心に駆られ自然と言葉が出た。ナギは不適な笑みを浮かべ背中隠していた右手を見せた。

「じゃん！どうだ？強そうだろう？」

「あ、あ、あ……！」

「まだ初夏だというのに地面から出てくるとは……。こいつは私が責任をもつて育て……。あれ？マリア？マリア？」

マリアはナギのとってきたカブトムシをアレと勘違いし、またもやへなへなと座り込んで一言も発しなくなった。

結局そのカブトムシはマリアの強い要望で後日、野に帰されたのだった。

（後書き）

Q なんで書いたの？

A 講義中に「アレ」が出たらしく「なんだよ。アレくらいで騒ぐんじゃねえよ。男はアレを触れて一人前なんだよ」と「アレ」に騒ぐ男子にイラッとして突発的に書いてしまいました

Q 他に言いたいことは？

A ごめんなさい。ホントにごめんなさい

……消せ！と言われたら消しますので。あはは……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1336m/>

アレ

2011年1月26日00時15分発行